る。岩子の頭は飢饉の酸鼻と、父親に死なれたことと、生れた家が一夜に影も殘らず、家具のすべてが全部失はれてしまつた事と、ともすれば母親が涙の目に二人の子を眺めがちでゐるもの悲しさと、それ等が入り交つて一ばいに埋まつてしまふほどであつたので、召使ひは數人あり、馬も二三頭はある家の子となつて、寄宿人ではあるとも、家人からは同情されるお嬢さんであつて、樂しい日のない筈はなかつたが、九歳の子の心にも以前とは違ふ、世の中の冷たい風といふものに無心に觸れ感じてゐた。

とはいへ廿七歳の寡婦が二人の幼兒を連れてかくれるには、全く氣苦勞のない住みよい土地であつた。二人の子は蟲々とまつ直にのびていつた。子達の生立ちばかりを待ちに待つ母親には、それだけのことでも日に日に新しい悅びであつた。そして長い日のあとにやつと岩子の十四の年齢が來た。母は娘づくつてゆく子を、あまやかせる親のそばへばかりおくのは後の爲によくないと考へた。これから家を再興させるものには、多くの人中を見せておく必要もあると思つた。それは天保十三年のことで、母のりえは岩子を連れて若松城下へと出た。

寄食人

母子二人がたどつていつたのは山内春瓏といふ醫者の邸であつた。春瓏は會津侯の侍醫で士分の學者であつた。醫で名のある弟子もすくなくはなかつた。その人の父も田中琳碩といふ醫であつたが、春瓏は山内姓を續いでゐた。春瓏の妻は岩子の叔母であつたので、岩子の薫陶を賴んだのであつた。山内家にも子女はあつたが、預けられた子であるので、春瓏は岩子に己が給仕をさせて朝夕に物ごとの事理を辨へさせようとした。岩子が所謂舊幕時代に奥羽の山間に育ちながら、後に見るやうな修養のあつた

のは、その資質にもよるとはいへ偏にこの叔父の薫陶が力あつたことを思はせる。春瓏は諺のやうに「日々に働け、日々に行ひを慎しめ」と言きかせた。またある折などは岩子の顔をながめて、

「見目かたちは生れつき、鼻は低くても天下一品、額が高くても天下一品」

と諧謔を弄するやうにいつて、實に岩子の處世觀を達觀させようとするやうに教へ導いたのであつた。

會津の土地も邊土にはかなり墮胎の大罪を犯すものが多かつた。ある日春瓏に診察を乞うた三十女は、夫のない身で出來た子の處分を姑に知られぬうちにしたいと賴みに來たのであつた。春瓏は暫時無言つてゐたが岩子をよんで餅米を一袋持ちきたらせた。そしてその袋を與へて祝ひの赤飯でも焚くがよい、姑にもあからさまに話して明く子を生めと、新しく生れるものの貴さをしみ〴〵と諭してかへした。その後岩子を呼んで女の務めを說聞かせたりした。岩子が後年墮胎についてその蠻風を改めさせようとしたのも、さうした教へが下積みになつたことは爭はれないことである。

岩子の夫

城下に名高い呉服屋で大黑屋七郎右衞門といふ、上町きつての老舗があつた、その店の手代茂助といふ律氣で賢い若者は、これもお城から西へ三里ばかりの高田在の名主佐瀨氏の次男で身元はたしかなものであつた。丁度似合の仲であるからといふはなしはまとまつて、岩子は良緣を得、横三日町に茂助を婿にむかへて一家を持ち、母のりえも呼寄せて幾年振りでかの我家に睦しく打くつろぐことになつた。茂助は手馴れた呉服ものの店を開いた。岩子は骨身もをしまず立働いて、母にも孝養し、夫にもまめやかで

あり、店も手傳ひ厨仕事も一人でして、終日にこやかに笑顔を見せて人々を樂ませてゐた。それは岩子の十七のをりで、岩子の生涯に全く樂しいときであつた。おりえにしても岩子はかく優しくあり、弟の方の半治は城内の士鈴木氏の養子になつてゐるので、彼女の長い間の苦勞も漸く解けて氣の伸々する春に逢つたのであつた。そして、若夫婦の上にも母の上にも、無事な月日がなめらかに長閑に過ぎていつた。その間には、折々、一人はなくてはならぬものと母から呟やかれてゐた子供が、二人が一所になつた五年目の嘉永二年に生れた、初子は女でつねと呼ばれ續いて四年に生れたのは長男裕三である。岩子の新宅は實に悅びの頂上で、店も繁昌し、土藏も建ち、番頭一人、小僧は三人とおくほどになつた。この分でゆけばと親子夫婦は晩の御飯などのあとで嬉しげに語りあふのを例としてゐたが、またしても岩子の使命の道へ導かうとする天の手はさうした慰安ばかりを長く與へて

おかなかつた。長男の生れた翌年の春、三番目の子を妊つてゐたをり夫の茂助はふとした病氣が重くなつてゆくばかりであつた。岩子の年が廿八歳であつたので、母のりえは自分の昔を思出して、岩子にはどうか自分の過して來たやうな悲しい目を見せたくないと祈つた。しかし人世の闇から黑い手が何處ともなく出てきて、人の目に光明を遮るとずべてがそのかけになつて寒い冷たいことにばかり遇ふものである。岩子はまたしても悲しい試錬にあふ時機になつたのである。知己の寡婦からたのまれ十三歳から預つて家のもの同樣に心を許しておけるやうになつた若者に、店のことをまかせておいたらば、主の病氣や出産などの取込みの多いのに附けこんで持逃げをしてしまつた。岩子はそれやこれやで産後の肥立ちも思はしくはなかつた。その上、父とも師とも賴みにする叔父の春瓏は閏五月の廿日の夜に突然發病して死去した。それは安政三年のことであつたが、そ

の前年から、またもや引續いて天變地變のさまぐの惱みが世の中に引起つた。禍ひは岩子の一身の上ばかりではなかつた。現今も話に殘る江戸の大地震は――海嘯も――安政二年のことである。三年には浦賀灣頭に黑船が來て、尊王攘夷、開港鎖港論など、天下は轟々として諸論沸騰し喧すしいことになつた。いづれの藩、いづれの邊土も內外の憂患に惱んだ。會津藩は武相の沿岸を守護ることになつたので、急使は走り、兵士は隊を組んで出るなどし、その後には火の消えたやうな不景氣が押寄せてきた。岩子の店もうちさびれていつた。

腕一本で

其時にまた一大事變は傳へられた。櫻田門外に閣老伊井掃部頭が斬殺れたといふことである。殺氣は若松城下にも橫溢した。商業の不況は極度に達した。非運な岩子の店はどうしたらよいかと一時は暗に閉されたやうに感じた。けれど、けれど、岩子は暗黑のなかから一道の光明をみとめ得たのである。彼女は腕一本で奮鬪し樣とする決意を求め得たのである。後に萬靈の慈母と仰がれるやうになつた岩子の使命はこの時まづ第一に(夫を助けてあげたい。母を慰めてあげたい。子達に幸福な路を歩ませてやりたい)と決意された。彼女の情愛は窮しつくしてから實に美しい光りを發した。

長女のつねが十歲を越すと、岩子はそれに留子の間父を看ることと、老母へ優しくすることを言附けておいて行商に出かけた。彼女は肩へ大きな包みを擔つていつた。彼女はさうして足で歩んでゐるうちも手は暇であると考へた。彼女は絲屑をまるめながら歩くことにして、それを色絲で美しく飾つて得意さきの子供たちに與へた。手もなくそれが景品のやうに

なつた。そして家に待つ子供のためにも何かしら求めて見たが、それも歩いてゐるうちに貧困なものに與へてしまつたりした。そして岩子が考へたには、子供達には何にも買つて歸るまいと思つた。なぜならば、(子供に土產をやりつけると、人を待たずに土產を待つやうになる恐れがある)と考へついたからである。この言葉は一般に子を持つ親の心得としてよい金言であらう、岩子は人情の機微な點を會得大悟した。彼女は言つた、

(三十になるとはじめて總てのものを思ひ知る)と。

かくばかり勉しむ岩子のほまれは高くなつて賞美の辭は藩主から下つた。けれども岩子は褒められたくてしたことではなかつた、それよりも夫の病ひが本復してくれる方が、どんなに嬉しいか知れないと思つたであらうが、さほど迄に心を盡して看つた夫茂助は、病みついてから七年目で世を去つた。出來ぬ中でも盡すだけは盡したとはいへ、いつとて先立たれてよい日はなかつたであらう彼女は、この憂愁のまだ新しい間に、またしても續いて母に死なれた。彼女にはこの母親は他の人が思ふよりも一倍懷しい母であつた。今自分が寡婦となつたにつけても、若かつた時分この母が人情ない姑のために當然受續ぐべき油屋の家を出され、何一品持たずに二人の幼子を抱へて實家に歸つたをりの事を思ひやると、いまの我身に引くらべて傷はしくてならなかつたのである。せめてその老後を安心させようとしたのも束の間であつて、かうした苦境を見せて死なすことが、心苦しいかぎりであつた。彼女はつくづくと世の果敢なさを觀じて、鎌倉へいつて尼にでもなりたいと呟くのが癖のやうにさへなつた。けれども彼女には夫の殘した子が四人と店とがあつた。彼女は行商にいつて見聽きする細かい侍の生活のめじめさと、農家の貧窮な小作人のあはれさも知つてゐたので、商人はまだしも結構なものであることを知つてゐた。さうするうち

に彼女はそれらから學び得たもので遠觀することが出來たので、強ち鎌倉へいつて尼になるにも及ばなくなつた。彼女はいつしか市井にあつても心鏡の明月を仰ぎ見ることに自ら至り達したのであつた。そして切り落した茶筅髪に、頭がかるくなつたばかりでなく心も輕くなつた。彼女は初て自分には何かの使命があるかのやうに感じて來たのである。

遺子を並べて

彼女はある日夫の遺子を並べて、つくづくと打守りながら呻吟した。女手で育てゝ、人並にしかならないのでは仕方がないと思つた。で、二女の豐子が奥向きに仕へる役人の長尾氏のところへ貰はれていつてゐるので、その長尾氏について相談をしたところ、心よく聽いてくれて、その人の肝煎りで姉娘のつねは藩主の姉君照子の君の侍女に、長男の裕三は家老西郷勇左衛門の小姓に住み込ます事になつた。さうして全く一人になつた彼女は家業に沒頭し儲けた金は貧者に施したりしてゐたが、相當の忌服をすませてしまふと店を他に讓り、家具類は知人に分ち與へて喜多方へ引上げ、それから後の事などを心靜かに考へてゐた。

天は彼女にさうした準備の時日を與へたのであらう、それが丁度彼女の四十の時で、會津戰爭の二三年前のことであつた。時に會津の大守は肥後守松平容保であつた。家老で名の聞えた人物に萱野權兵衛があり、年若なれども當時の時世に曉通し、明晰な頭腦を持つてゐたものに西郷頼母がある。この人は後會津藩が朝敵と呼ばれる非運に際した折藩主に歸順を進めたのであつたが、其意が通らなかつたので、彼の一族は潔く自刃して孤忠を明かにしたのであつた。

とはいへ一時幕末における會津の勢力はたいしたものであつた。京都

守護職の大任ありゝことに讓夷說には穩健であつたので、長州藩とは意見が合なかつたが、薩摩は會津に贊してゐた。會津藩は幕府の親藩であるゆゑ、當時の武力の手薄なるのをよくしりきつてゐたのである。それゆゑに幕府からも信賴されてゐた。殊に會津は先祖保科正之の遺訓により子弟の養成に心掛けて來たのは、日淸館の敎育法に見ても知れる。忠孝文武を奬勵し、驕奢安逸を戒め、節義質素を旨とし、剛健の氣風を養つてゐた。一朝有事のときといふことが總ての規であつた。けれども悲しいことには、人心の騷擾してをるときとて、憂國尊王の臣も順逆の別が、朝に夕に改變されたをりからとて、昨日の忠臣は亂臣の汚名をうけ、昨日失意のものが今日の朝議に必要な先鋒となる時機になつた。王政維新の曙光の前には混沌たる曉があつた。天下の形勢は變轉極りなく、討幕勤王となり、佐幕勤王となり二流になつて爭はれた。諺にも、勝てば官軍、敗ければ賊と、いみじくもその機微の消息を唄つてゐる。

維新の動搖

江戸城はさうして明渡された。將軍は恭順の意を示しても、騎虎の勢は、憤慨の士を軍艦に乘せて函館に脫走させ、五稜閣の戰ひとなり、陸戰隊は東北に屯し、彰義隊は德川氏譜代の恩顧の者が、朝敵の汚名を着ながら、天朝に敵對したのではなく、嵩にかゝつた討幕軍の諸藩に報いる弔戰であつた。

會津は徒らに戰ふのを好まなかつた。德川譜代の臣として、主家の寃を訴へ、朝敵の汚名から救はうと企てたのであつた。仙臺米澤の隣藩でもその事情はよく察してゐたゆゑに、公明正大の處置をとられるようにと願ひいでたが、朝廷の重要の人にまではその意が達せられなかつた。奧羽征討參謀某が明察を缺いてゐた爲に、あの慘澹たる白兵戰は行はれたのであつ

た。あまり洞察のなき仕方に奥羽の列藩はみな戟を逆にした。名を王者の師に假りる痴者の軍隊であると彼等は怒つた。奥羽廿五藩は一致して、會津の寃を雪がうと太政官にむかつて盟約連署して訴へいでた。それは明治元年閏四月末の三日のことであつた。

そのうちにも戰爭はつゞけられた。白河の關も破られ、長岡には苦戰し、若松城下は日に日に暗然として來た。石莚口の敗軍、戸の口の急場と、つゞいて悲報は耳に接してくる。その折の會津は一國をあげて戰つたのである。人も知る白虎隊は少年ばかりでなりたつてゐた。その他には女人隊もあり、農兵の一隊もあつた。いま歐洲大戰の白國を思ひ見ても、この壯烈悲慘は敢て劣るまいと思はれる。士人となく、老若となく、男女の別なく、會津人の持つた心の意氣地が、此凛然たる凄壯な悲慘を生み現はしたのである。士人の妻女母子は生殘るのを辱ぢて、一族打揃つて自刄した。老人は國難に立つことの出來ぬ身を憤り、腰のたたぬものは戸外に這ひいだし小銃を打ちつゞけて後切腹してはてたりした。會津人士は一概に「恥」といふ一言のために戰ひに殉じた。「恥」の一字は千鈞の重みである。彼らは國賊の汚名をどうして雪がうと思つたであらう。彼らは國守の無念をいかに雪がうとしたであらう。最後に彼らは安閑として生殘るのを恥ぢた。彼らは國中をあけて全滅し、その意氣で會津のうけた汚辱を雪がうとした。岩子はその時どうしてゐたであらうか?。

會津の落城

岩子も活動した。彼女は入城の路をたたれてたゆたふ兵士の一隊に行逢つたときに、何がために休んでゐるかと問うた。と、何事か議してゐた隊長が、

「兵士が飢ゑてしまつたのだ」

と答へた。その時岩子は勃然として、

「砂を嚙んでも一時は凌げる。今日の場合ではないか」

と力説した。女子にさうまで辱められた兵士達もまた勃然として入城の路を高久にとり走りだした。岩子も敗けずに引添うていつたが、總大將萱野權兵衛にさとされて、岩子は他に活動するため一時避難をした。

敵の打つた砲彈の、まだ煙りの立つてゐるのに鍋をかぶせたり、濡らした蒲團をかぶせて消止めたりして戰ひに出ぬ老人達は鑄替るのを役とした。かくしてまで戰つた籠城も餘儀なく明けなければならない時が來たのであつた。死者傷者、人命を損じたことはいかばかりであつたらう。城中二十の空井戸は戰死者の軀をもつて埋れ、ありとある長持にも入れて合葬されたものの靈は、生きて泣いた者よりも悲しんだことであつたであらう。

けれども、その爲に殘る幾多の生靈は助けられ、戰爭の慘禍はまだしも多からずして救はれたのである。岩子はまた此處に大なる教訓を得た。彼女は特志者にはかつて早くも救ひのために手をひろげた。彼女は前に立つて資を投出し、夜具藥を求め與へ、生產力を失ひ肉身に離れてしまつた者達のために奔走をはじめた。

彼女は歸るに家のない士人の子女を集めて前の藩校日新館の形ばかりのものでも殘したいと學校を建てる事について心配した。戰後の入り亂れた中に、親も兄もなく孤子となつたものを打捨てあるのを見ると折角の美風は磨滅されてしまつて、教育のない徒者達のために害されてゆく憂ひがあつた。岩子は非常の困難に打勝つて、漸く畑地二畝ばかりを借受け學校を建て、それらの子女を收容した。

さてさうなると肝要なのは教師の人選であつた。彼女は戰士の負傷者

のなかから、以前の日新館の教師であつた淺岡源三郎といふ人を見出した。そしてその淺岡の嫁に世話をするからと娘を持つてゐる地主を說きつけて、漸く敷地を借りうけたのである。ところが意外な邪魔は現はれた。それは戰後に新政府から設けられた民政局の出張所である。何事も歸順者はその指揮をうけなければならない。上の方の爲政者にさうした邪智のあらう筈はないが、命を受けつたへるだけの者は賊軍であつたといふを角に事毎につけ人民を虐げた。岩子の幼學校設置についても賊軍の子弟を教育するのは考へものだといつて容易に聞届けなかつた。そのうちに歸順者は、東京、越後、高田へ預けられ、謹慎といふことになり幼學校になくてはならない淺岡教師も東京へやられる事になつた。

私學校を起す

岩子の弟の長尾半治も正奇隊の戰士であつた爲に、千七百三十五人の人人と共に高田へ預けられた。明治二年正月五日が出立の日取りであつた。岩子の男の裕三は家老の家に仕へてゐたが士分でないといふので許された。岩子は裕三を淺岡の代理にして東京へやり、淺岡を許して貰ひたいと願ひ出たが許されなかつた。裕三は母の言ひふくめによつて、自分は白虎隊の一員だと言ひたて、民政局へ嘆願の結果、漸く淺岡の代りとなる事を得た。岩子は我子に代へて淺岡を殘し止め得たので、早速に工事にとりかかつた。校舍は三間に五間一棟、二間に三間の住宅兼食堂事務室一棟を建てることを許可された。土地は小田付村の川端で、目じるしになる杉の木が二本柳が一本、桑の木にとりかこまれたところであつた。岩子はさう定まると、古机、硯、文房具類を寄附してもらふために歩いた。

生徒は五十人を越してゐた。八九歳、十歳を一組にし、十一から十三まで

を一組、十五歳は上級とし、日新館の舊制に則り、いろは、源平藤橘、商業往來庭訓往來を手習に、讀み方は孝經、大學、論語、孟子、中庸、小學を十三歳迄に一通り素讀させるのであつた。さうなると淺岡一人では教師が手廻らないので、鬼佐川と聞えた勘兵衛の伯父で、弓術、砲術、擊劍、佛式調練を教へてゐた佐川又次郎も教授になり、算術の師には家老の次男であつたが、幼少から盲目になつたために、音曲、謠などにも秀でた人のあるのを賴んだりした。學問の暇には養蠶、機織り、裁縫、漉返し紙の製造、染形紙、疊表、笊籠などの製產を學ばせた。

岩子は學校の方の手がすくと寺院の僧侶と計り各宗合同して戰死者の大施鬼餓を小田付村萬福寺に營み、示現寺四十三世隆覺和尙を導師としたりさうかうするうちに岩子の赤誠は官途の人にも認められるやうになつた。明治三年三月民政局より御用のお召があり、折包みに添へて一包の賜ものがあつた。けれどもその次の年に、岩子の幼學校は閉校しなければならない餘儀ない事情が起つた。それは會津藩士は陸奥の斗南三萬石に封じられたので幼學校の生徒も過半は減じてしまつたのである。岩子は希望の實をもぎりとられてしまつたやうに思つた。ところへ東京から裕三が歸つて來て土產ばなしをしたので再び岩子の望みは生返つた。それは東京深川に貧民救助の事業をしてゐる人があると聞いたからである。岩子は早速旅裝して出京した。明治五年である。岩子は小山から古河にと道をとり、關宿から舟で中川に出て深川へ着いた。

岩子の上京

當時深川には古河の下屋敷があり、そこに佐倉藩の大塚十右衛門が救養會所を設立してゐた。それは小規模ではあつたが養育院の前身であつた。

岩子は大塚氏を訪づれていつて、事業の有樣を參觀すると、啓發されることが多かつた。岩子は救養會の分所を會津にも設けたいと思つたが、も一度鄕里にいつてくる旅費の工面がつかなかつた。或時ふと一策を思ひたつた。彼女は東京で干魚を買込んだのである。岩子は路々干魚を賣つていつたが、行く道は山國でだん〳〵に海に遠くなるゆゑ宇都宮までゆくうちに賣上げは資本の三倍となつた。歸鄕した岩子は直に澤縣令に計畫を語つたが、さういふ事は出來上るまでは單獨でやつた方がよいと思ひ、會津の近鄕岩崎村長福寺に居をさだめた。そして第一着に岩子は墮胎矯風に手をおろした。女子には裁縫と機織の業を敎へ導いた。かくて岩子は「佛の岩子」と呼ばれ、「瓜生の母さん」と敬されるやうになつた。「瓜生の母さん」とは主に無賴の博徒などが呼んだ。なぜならば彼等の間にあつても紛擾は彼女によつて大間違ひにならずにすむからであつた。岩子の善行は益〻世に知られるやうになつたので、十三年には福島縣令山吉盛典、十五年には三島通庸縣令、十八年には赤司欽一、十九年には折田平內の各代々の縣令知事から賞與された。ことに三島氏は力をかした。後になつても三島氏は岩子の事業を助けた。それらの便宜から二十年の秋に福島市の長樂寺のかたはらへ移り住むことになつた。そのころから岩子は日に一錢貯蓄の銀行が必要であると思つたりした。

岩子はまづ養育救護所の設置のために、富豪貴紳の邸宅を訪れ寄附を仰がなければならない必要にせまつた。彼女は出京してその運動に着手することにした。そのをり三島氏は岩子にとつて忘れてならない後援者であつた。當時三島氏は警視總監をしてゐたが、岩子は總監邸に起伏して紹介される邸宅へと訪問する。岩子はあまり風采のあがつた方ではなかつたし髮は茶筅にした半白の嫗であり、衣類は洗ひざらした太織布子に毛じ

ゆすの帶を締め、大きな風呂敷包を背負つて後切れ草履を穿いた姿で何處へいつてもまづ厨口にゆき板敷に頭をこすりつけて一禮してから訪問の故を述べるので、知らぬものは一見して何者かと賤しむものさへあつた。されど訪問の趣意が分つて主人が逢ふ段になると、この老媼は東北訛音こそあるが音吐朗々として、立案は確固とし、畫策は實に緻密であり、素朴ながら純潔高尚な志望を縷々として盡きず語るのであつた。板垣伯はよく其の說を容れたので彼女は自由黨婆と呼ばれるほど政黨のことにも精通した。

岩子の事業は盡きる時を知らない。人事に、不時の天變に、世は開明聖代であつても突發する出來事は防ぎ得ない。二十一年七月十五日朝には帝都まで餘震に驚かした岩城の磐梯山破裂が起つた。岩子にはことに鄕里の出來ごとである。山下の一村は全村土の底になつてしまつたといふやうな情報は岩子を驚かせた。岩子は其處にも必死の働きをしたが、山下猪苗代湖畔にての大供養の計畫は齟齬したものの、永代供養塔は彼女の盡力によつて成つた。そして二十二年十二月には私立救育所は彼女の希望通りに設立された。それよりも前に偶〻松島遊覽の途次、中山一位局はその救濟費の一部にと金五百正と菓子折とを岩子に寄せられた。金額こそ高が五百正であれ、一位局は時の聖上の御生母である。その御方から「瓜生の母さん」に過ぎない一老婆への下されものとて地方の人は目を聳だて、岩子の事業へも注目しだした。その次の年にはまた洪水の災害がありなどして彼女の救育所はます〳〵囑望されるやうになつた。

大活動期に入る

彼女には第一着手である多年の望みの救育所は出來上つたのである。岩子は活力を他へ轉換するやうになつた。彼女の思ひたちは貧民救助に

かね廢物利用の、生産物を教へることであつた。水飴改良はこゝろみられた。麥かすは食料にならぬゆゑに、水飴の原料に蒟し麥を用ひようとするのである。蒟し麥の汁と餅米を交ぜて飴を造れば、飴粕(餅米粕)から食パンを造ることが得られるやうになつた。それは立派に食物となる食パンである。彼女がさういふ試みをしようとする時には曉に起きて、家人の知らぬ間に竈に向ひ種々の工夫をこらした。彼女はまた家憲として正月三日には自分がさき立ちになつて餅を搗き、それに鹽鮭をそへて貧民に贈るのを家例とした。

水飴改良の機械は出來上つた。彼女はまづ手近くにその諸道具をさけて遊説に廻つた。上京して根岸に住ひ、例によつて諸方を訪問した。岩子の事業は漸く一地方といふことから拔けて國家といふ大きな主體に接近してきた。彼女は時事に感じて暗殺謀殺などの不可なことや新舊思想の衝突や、宗教界の腐敗等を慨して書綴つたものを公けにしたりした。無智な者共からであるとはいへ、瓜生大慈悲閣下、瓜生大君などと署名した感謝狀が來るやうになつた。

岩子の理想は、最高な思想から孕まれ生れたものではないが、それだけに目前の應急策と利殖救濟には適してゐた。そしてその目前當面の救ひの手は、知らず知らぬ間に廣遠なものとなつていつた。或ひは聽く人の耳にはをかしいくらゐ幼稚なものもあつたかも知れない。けれど彼女の赤誠はそのあかんぼのやうな無垢の誠心から生れるのであつたと思はれる。彼女はある時鄕里から來る途次の汽車の上で鐵道枕木が栗の木材であることを思ひ、那須の鑛野などにステーションのあるを見、なぜステーションなどの空地に栗の木を植附けないかと說いたことがある。二十四年二月、彼女はこの帝國にはじめて開かれた議會にむかつて「婦女慈善記章」の制を

設けられたいといふ請願を、福島縣選出議員山口千代作の紹介で提出した。これは取りも直さず、現今の婦人公共團體における有功章の創始であらう。岩子の申出は議會でも採擇せず、政府でも容れず、伊藤博文公から一箱の慈善記章を贈られただけであつた。とも角岩子はその間に鄕里の救育所で二百人からの子女を養つて世に出した。二十四年三月には聘されて本所長岡町の養育院に幼童世話掛長となつた。當時宮中の才媛の雄であつた稅所敦子刀自は、岩子の志望を讃へて、

たのもしき老木のかげのなかりせば、小松も千世はへがたかるべし。

ははきぎのかげを離れし撫子もめぐみの露に生したつらん。

と讀み與へた。をりから劇場歌舞伎座に上流婦人主催の慈善演藝會があつた。彼女は飴粕せんべいや、パンを寄贈したので、香川皇后の太夫によばれて高等女官方に面接する榮を得、それが機會となつて宮中局門へ出入を許される事になつた。六月になると彼女は女官の手をへて皇后陛下へ自製の丹精をこめた飴糟せんべいの折を一箇奉つた。六十三歳であつた彼女は室町高倉兩典侍より饗應を受け、陛下よりは御物をいただき食事を賜り典侍よりは金品を贈られたりした。あまりの忝さに感泣した彼女の上へ光榮はまた重ねて下つた。彼女が恐る〳〵伺候すると、稅所權典侍が出て慈善事業についての話を聞かれた、その席には柳原權典侍も居られた。そして兩典侍は、

「どうかお勵み下さい、貴女の長年の御志には感じ入りました。私達も幾分のお助力はいたしませう。どうぞこの聖代の御恩澤が、あはれな者達にまで遍く達しますやうにおつとめ下さい」

と言つて、菓子料理を饗し、縮緬一疋、紬一疋を與へられた。

郷里の事業

かく岩子の名聲嘖々と上るにつけ、郷里からは頻りに岩子の歸省を促してきた。公共の育兒會を組織させたいといふのであるのでよんどころなく岩子は引止められる袖を振離して、名殘惜しい訣別を院兒に告げた。郷里の方では待ち構へてゐたので、岩子の歸郷の日は若松地方の老若とも郊外數里の外にまで迎へに出で、旗をたて、樂を奏して盛んな歡迎ぶりを見せた。そして育兒會は株主の會員組織のもとに設立された。この貧民兒童の救育につゞいて、岩子が最初からの志望であつた墮胎矯風、產婆改良を思ひたち、喜多方町に研究所を設け、產婆法の改良をはかつた。そして二十五年には福島町は瓜生會を開き、福島市にも育兒院が生れ、その副事業として施藥院を起すにつけ、地方有志の斡施と、東京の貴婦人、別して女官達の庇護

によつて、若松に私立濟生病院が開かれた。

二十七年日清戰爭が起るや岩子は郷里に居たたまれず上京し、水飴精製造傳習所を根岸に設けて望むものに敎へ學ばせた。そのをりは日々の侑ひまで給したので、盛況であればあるほど經濟は苦境であつた。そのなかでも岩子の研究心は芋屑といふものに目をそゝぎ、芋屑を原料として水飴を製造することを考へ販賣し、芋糟の食料法も案じいだした。間もなく甘藷製水飴は陸軍衞戍病院へも赤十字社へも寄附され出征兵士のためにも贈られた。また女官方の心盡しから、岩子に與へたらば活用の道があらうとて、繃帶の斷屑を馬車に三臺下賜されたので、岩子はそれを基として記念織といふ布を織出した。戰死者の妻子へあて哀悼のためにおくる用には、その布へ敎子典侍の和歌が記された。

國のためつくすこころはたをやめも、ますらたけをに劣らざりけり。

かくて記念織は皇后陛下の御覽にまで上つた。時の宮内大臣土方伯の夫人は岩子の志望と趣意とに協賛し、上流夫人の有志を集めて瓜生會を組織された。もとより其折は出征軍人及びその妻子父母を犒ふが目的で會は起された。そして伯爵夫人土方龜子、子爵夫人三島和歌子、侯爵夫人西郷清子、侯爵夫人大山捨松、伯爵夫人樺山登茂子の名によつて各縣知事にむけ趣意書は送られたので忽ちに支部は各縣に起される盛況になつた。全國の貞操節義の婦人を表彰することは、その會の大なる目的であつたが、事蹟をあつめ史編をつくるのは短日月には至難の業であつたので、戰沒軍人の寡孤で賞讃に價ひするものには記念織を贈り、瓜生會の名で淑德を表彰した。他人の動をかくまで貴び重く見た彼女もまた、德孤ならずといふ譬に洩れなかつた。二十九年五月賞勳局から藍綬褒章をさづけられたのは、我國に於ける婦人でこの章を受けた嚆矢であらう。その七月には彼の東北三陸大海嘯が幾萬の生靈を失ひ奪つた。岩子の老軀は直に其處に現れ人にさきだつて奔走し惠みの手を垂れた。

女傑の死

誰が上にも死は當然來るものである。六十九歳といへばかなりな長命といへよう。けれども岩子にはまだ生きる日があつてもよかつたかと思ふ。けれども又思へば彼女は永久に生きたのである。彼女の生命であつた事業は勃興し、國運と共に滅する時はないであらう。そして彼女が瞑目の時には彼女から生れた事業は公共團體になり、彼女をほゝゑませる程に成長してゐた。彼女は寒威のをりから仙臺にゆき歸途福島で落命した。病ひは心臟病であつた。忝くも后の宮からは、この一個の寒村に生れた老媼の臨終に御見舞の御菓子をくだされた。諸方からも懇切な慰問があつた

が、三島夫人からのたつての申入れにさしも聽容れなかつた岩子も牛乳、鷄卵を接取してゐたが、夫の忌日であるといふ日に梅干と白粥をよろこんで喫したのち、重くなつた。死の前に、

老の身のながからざりし命をも助けたまへる慈悲のふかさよ。

と天地の四恩を感謝してのち靜に世を終つた。葬禮は福島長樂寺に營まれたが、亡軀は護法山下の示現寺に、開喜上人源翁和尚の墳墓のとなりに埋められた。後三十二年六月、東京日本橋倶樂部で、瓜生會の發會式が擧行され、遊行上人によつて岩子の供養はおこなはれた。彼女の銅像は、平素の主義に則り帝都のうち最も平民的な淺草公園に建てられ、瓜生會には四恩會が合して四恩瓜生會となり更に發展し、日英博覽會には、會の事業及び故岩子を紹介して銀牌を得た。

とはいへさうなるまでの岩子の苦心は、思ひ見るばかりでも涙ぐまれる。

ある時は堪へがたい侮蔑を受けた事もあらう。ある折は心無いものに罵られた事もあらう。さあれ彼女が爲遂げた事業は、珠玉のやうに光る。それは彼女の精神の光輝でなくてはならない。彼女には不幸から生れた博愛であつたかも知れないが、彼女が廻りあはせた若年のをりの不幸は大なる幸福を生む母であつたのである。彼女もまた至大な幸福を得た人といはねばならぬ。

奥村五百子

二體の銅像

淺草公園に散策した人は、あの背をちよこなんと丸くした、柔和溫顏の慈悲の相を現示した瓜生岩子の銅像になつかしみと親しみをおぼえるであらう。その人がまた九段の招魂社に詣る途中、牛が淵公園の傍をよぎるならば、そこに愛國婦人會の建築物を見、その構内ではあるが路上に近く設立られた、凛然とした奥村五百子の立像を仰ぎ見るであらう。一個は慈悲の權化である女性であつて、本願なる聖觀世音の境内に長く慈愛の相を垂れてゐる。一個は王城の傍らに内濠の水を後にし、九重の宮居を廻らす石垣の下に、國家鎭護であり護國の神である、國民の血潮を犧牲にした靖國神社の坂下に意氣天を貫く至誠を持つて、萬世に懦夫をたゝしむる威貌を示して、颯爽たる氣魄を止めてゐる。共に所を得、その人の心を得たものと思はれる。

岩子と五百子は、前後してといふよりは連つて明治聖代に出でた博愛の烈女であらう。一人は女性的であり、一人は男性的であつたが、此表裏二つながら、共に女性の有する力の代表である。二人の生れだちが柔と剛と各自の特長の方へ伸びていつたのである。岩子は東北の寒村に生れた百姓の子であつたが、五百子は南國の海邊に生れ、學問ある寺院に成長し、父統には大和民族の最も正しい血筋である貴紳の血をひいてゐた。さうした由緣が一人を消極に一人を積極にしたのである。五百子の氣宇の大さ

かつたのは、彼女を生した土地にも由り、父親の氣概を受けたにも由る、彼女は時代精神の洗禮を受けた、「選まれたる者」として世に出されたのである。

岩子と五百子

岩子の慈相には、精神の愛のしたゝりから釀された美がある。けれどもそれは人として渾然と出來上つてからの美であつて、彼女は決して美人ではなかつたらしい、寧ろ醜婦であつたかも知れない。けれども彼女には却てそれが幸福であつた。彼女の事業は彼女の思上らない、內面的にこつこつやつていつたところに長所があつたのである。女子の持つ美質の中の、ごく質素な勤儉の美風がそこに釀されもした。それとことかはつて五百子の心地よいまでの威風は彼女が若かつた時は美人であつた事を否せない確證になる。美は何物にも打勝つ超越した力を持つてゐる。彼女の英風、彼女の確固たる自信力は、性質からでもあらうが、彼女が怯むところのない立派な容貌と姿を持つてゐたことが、どれほどに彼女の事業を明るくさせたか知れまい。岩子の傳記を見れば、彼女が星霜にどれほど試錬されたかを知ることが出來る。彼女は天の使命を受けて勉め勵んだのである。五百子は何物をか引攫んで生れて來たやうな人である。彼女の五體は包むにあまるほどの器宇を盛り入れるために育ち躍動したのである。岩子は六十九歲の天命を全うして、安心立命のなかに死んだ。五百子も六十三歲まで命はあつた。それに愛國婦人會は盛大なものとなり、成立後七ケ年目で五百子の沒するときには七十萬の會員があつた。それであるのにもかゝはらず、臨終の前日に、

「會は盛大になつてゐるやうに見えるが、決してさうではない。成功はしてゐない。どうかして眞に國家の爲になる會としてくれ」

と言つたのに見ても、彼女には自分の持つ力と器字を容れるにたるだけの五體が一代五十年だけでは足りなかつたかと思はれる。彼女はきつと、口に言現はせない魂の靈感を事物に現はしたのち、他の人の同感がすこしでも不純なものである時に、何とも言へない物足なさと遺憾さにぢりぢりとした事であらうと察しられた。晩年はことに重い病氣もあつた事ゆゑ、心と體と一致しないもどかしさに悶えもしたであらう。然しそれはみんな國家と人道のためであつて、彼女自身の我儘や、慰樂のためではなかつた。さうはいふものの、五百子の死は順當であつた。彼女の愛國婦人のために恩人である近衛公爵はその三年前に逝去され、その次の年には皇后陛下に拜謁し、病ひのために退隱して故鄕唐津に歸り、そして後靜に歸元したのである。

「今日一日」主義

彼女は「今日一日」といふ事をしきりに口語としてゐたといふことを、北清に同行した南條文雄博士が語られたことがある。「今日一日」とは本願寺八代の大師の教へに、「佛法に明日といふ事あるべからず候」とあるのをとつたといふことである。その今日一日主義者が渴仰した人物はといへば、古へに神功皇后近くに春日局であるといふことである。肥前唐津の濱虹の松原の形勝の地に生れた彼女に、神功皇后は理想の人としてさうもあらうと頷かれ、彼女の性質とも一致したところがある。九代目團十郎の扮した「春日局を見て我意を得たものとし、それからは自分も毎に春日局をもつて任じてゐたといふのは、博文館で女傑十二人を募つたをりに選に洩れよう筈もなく、その一人となつたので記念の額を贈られたが、自慢の大きな目がそ

の額では細かつたので氣に入らず、持つてゐるのも嫌だといつたのと一對の佳話ではないか。自分の說が通るまでは、幾日でもその家の門までお辨當がけで通ひ、尊敬するに足りる人に對しては恭虔であり禮讓に厚いが、權門富貴に媚びず、樣とか殿とかいふ事は理由なくてはつけないほどであつたが、さうした一面に愛らしい無邪氣さがある。彼女の眼は全く自信する通り魅力があつたのである。感興いたれば烱々とし、ある時はその眼を剝出して睥睨するのであつたが、美しい輪廓の顏からいへば、愛嬌も非常にあつたのである。

北清行き

北清行き――それこそ愛國婦人會を生みいだす動機となつたもので、それよりさきに五百子は南清視察にむかつたことがある。その用は本願寺布敎事業を助け、その傍ら支那の上流婦人と接觸する機會を得るためであつた。それらの斡旋は舊領藩主小笠原伯爵が主として、近衞公爵や、陸軍省では長岡將軍などであつた。この行には愛住女學校長小具貞子も同道であつたが、五百子は氣管支加答兒の持病を持つ身として藥瓶を提げてゐた。句佛上人大谷光演師は、

栴檀の枯れても殘る馨かな
ちりてこそ我日の本の櫻かな
散る時が浮ぶ時なる蓮かな

と餞け、小笠原子爵は、

ゆけよ君すめら御國に照る月は、から山かけてすみわたるらん

美麗しい緋天鵞絨の信玄袋を贈つた下田歌子女史は袋の裏へ、

日の本のまことの種子をもろこしの、原にも植ゑよ大和なでしこ

と書きつけた。そのころ世上の注目をひいた海の郡司大尉、陸の福島中佐も彼女と心合の友であつた。彼女は諸種の便宜から、歸途は軍艦宮古に乘つて歸る特權を、伊東大將から得てゐたので、便乘して水兵に演說をしたりした。その行は南清にかぎられてゐたが、五百子はその時から北清の視察を思立つてゐた。をりから北清事件は持上つたのである。各國使臣義勇兵は相集まつて團匪を防禦したが、分けて其中心となつて働いたのは日本軍の守備隊であつた。五百子は南清視察の情況を述べた末に、北清軍にむかつて慰問使差立の必要であることを切に言つた。近衛公も國家時世の大勢に鑑み、考慮するところはあつたが、五百子が希望通りに、慰問使として本願寺の連枝差立のことは、到底五百子の願ひのみとしては成立させがたいと苦心のすゑ、その願意と五百子とを伴つて小松大宮殿下のもとに參殿した。かくして五百子の願意の公の方は運んでいつたが、をりもをり內務省から出た宗教に對する布達が、東本願寺の感情を害した結果、布教のことにも慰問使のことにも混雜が起つた。さうと聞くと五百子は重要の書面を持つて烈しい下痢になやむ身を京都へと運び、役僧會の席に出て全部反對論者の中に立ち信ずるところを說いて讓らなかつたために、老法主に許可され連枝大谷勝信師差遣の報告をもたらして歸京した。そして彼女は何事も自分についての希望は洩さず、一人密かに京城へと向つた。十月九日仁川で慰問使の一行に行逢つた彼女は、待構へてゐたことは色にも見せず、連枝の前へ出ると、

「私もお連れ下さい」

と言つた。一行のなかには、女が交るといふことはないとの異議もあつたが、

「面白いおばあさんだ、連れてゆかう」

と許される事になり、彼女は望みに望んでゐた慰問使の隨行の一員となることを得たのである。その時の天津領事鄭氏の夫人濱子は、女子として一人止まつて盡し、その勳功により後に褒賞を賜はつた貞烈な夫人である。その夫人の談として傳へられたのには、夫人は領事館内に籠城して、一箇月以上の心配と盡瘁とに焦慮しつくし、漸く安心の狀況に稍復したをり晩餐をしてゐると、慰問使一行の到着があり、その名刺のなかには、奥村五百子の名もあつたので、再び團匪に逆襲されたやうな氣がしたといふことである。それほどまでに怖い恐しいお婆さんだとばかり思つてゐたらば、その慰問の仕方の優しみと、同情親切とには、實に歡びをもつて感謝するよりほかはなかつたといふことである。この一行がいつたので戰死者のためには鄭重にして盛んな法養が營まれ、濱子夫人もはじめて外出して死者の墓へ參ることが出來もしたといふことである。

慰問使

慰問使の一行は北京へと向つた。この一行が通州から北京へはひる時に馬車は三臺しかなかつたのである。彼女は老年でもあり風邪の氣味でもあつたので、荷物車に載る筈のが正式の隨行員の席を讓られることになつて出かけた。ところが北京の廓外へ着いて見ると、五百子の馬車が續いてゐなかつた。暫くすると空馬車は悄々とやつて來た。聞いて見ると、あまり動搖きの激しいために下車てしまつたといふことであつた。一行は案じない譯にはゆかなかつた。何分戰亂の間もない後のことと、どうなるかと評議とりどりのところへ、杖にすがつた彼女は辿りついた。その日北京駐屯の日本軍隊のなかで、今日郊外の高粱畑のなかに、日本婦人の怪物が立つてゐて、しきりに日本軍萬歳〳〵と叫んでゐたといふのが評判にな

つた。その怪物とは途歩杖にすがつて北京にはひつた五百子、その人であつたのはいふまでもないことである。

一筆進じ候、國許一同御機嫌ようお揃ひなされ萬々おめでたく申納めまゐらせ候。次に私も京城まで御用にてまゐり候處急に清國天津、北京まで御用向き明日中北京へ着いたし候。今日まで無事、御安心下されたく候。浮世とは申ながら、實に筆にも言葉にも盡しがたし保利老先生へ別紙差上げまをさず、此文着次第よろしくおつたへ賴上げ候。

梁がらの中わけゆくや唐の旅

あはれさをいひつくさんとおもへどもなみだこぼれて袖ぬれにける。

天津より北京まで三十四五里のところ、實に申進じやうもなくござ候。

誠に誠にあはれあはれ〳〵〳〵諸君國家を忘るべからず。歸國の上積る御物語仕るべく候。小林おたか殿外親類中へよろしくよろしく。

十五日講中御一同にもよろしく願上候。

一御佛前へのお花何とぞお賴み申候。

一孫三人共御無事か、朝夕あんじ申候。此文着次第仁川別院にて返事待入候。まづは右申進じたく、あら〳〵日出度かしく。

十月十九日

この文は北京へたつ前の日通州から發したものである。名當は高德寺どの奥村とし殿おなじくみつ殿とある。敏子とは唐津に殘り、家事をまかなひ、母に後顧の憂ひなからしめた孝子で五百子の長女である。五百子はこの歸途、一行とは仁川で別れた。一行と共に以前の韓國皇室を訪問したをり近衛家から拜領して携へていつた赤地の襠を着て謁したといふことである。國風保存といふやうな意味が、愛國心と共に女史の心に切に感じられたものと見える。

國滅びて山河あり――四海同胞といふ廣義な平等博愛の念は切實なる人類の要求であらうが、亡國の民の哀れさを見れば、まづ健實な國家を造つてのちに、それらを基礎にして平等を說き、强惡を挫き、弱き善を救はなければならない。兵を多く傷ませればそれだけ國家は損じ、國民は貴き血稅を失はなければならない。內にゐて働くも、外に出て難苦するも、みな國家の寶である民衆である。その一人に厚く、一人に薄くすることは公平でない。

百子は慰問使の一行に從ひ、つぶさに遠征の軍士の苦を知つた。彼女は一日も怠諸にすることは出來ない仕事があると思つた。

愛國婦人會成立動機

かくて彼女の愛國婦人會は生れる機運に達したのである。けれどもその創立までの苦心はどれ程であつたであらう。會と名付けられる大體が出來上つてからの遊說や、その趣旨を說くのは創立までの苦しみにくらべられるものではなかつた。何にもないところへ一つのものを建立ようとする。それには大體の圖案、目的を示さなければならない。それが固定物であつてさへ容易なことではないのを、在來我國に一つもなかつた大きな會の目論見であるから、とても彼女ほどの熱誠がなかつたならば目的を貫くことは困難であつたと思はれる。彼女はまづ例によつて近衞公にその趣意を語つた。そして公の口から「さういふ事をするには上に頂くものがなくつてはいけない。まづ現在で適任なお方は岩倉公爵夫人であらう」といふことを聽いた。彼女は早速に維新の元勳である故具視公の息である公爵の夫人久子を訪ねていつた。けれどもすぐに諾なはれる手輕のものではない。久子夫人が承諾するまでにはお辨當をもつた彼女の姿は岩倉家の門前に幾日となく見出された。愛國婦人會の目的は戰死者遺族救護で

ある。彼女は瘴疫の地に不良な飲水をとつて、糧食のつゞかぬために生黍、生高粱を嚙み、そのあまりをポケットに入れたまゝ戰死した多くの同胞を見てきた。この兵士も陛下の赤子である。國のため、陛下のため、また同胞のために、これだけの犧牲を拂つてくれるのに對して、内地の者は何をもつて報いようとしてゐるであらう。飽溫暖食の徒の夢にも知らぬ難苦を冒して、異域の鬼となる此人達の子や、妻や、老いたる親、それらの遺族たちのうちには餓死するやうな境遇のものもあるであらうと感じた、深い深い印象が、彼女の頭腦から消えなかつたのが、巾幗社會の曉夢をさまさうとしたのである。彼女は叫んだ、

（たつた半襟一掛に過ぎない）と。

愛國婦人會は半襟一掛主義をもつて立つた。年に一掛けの半襟代を婦人達が節すれば、其一團の集金によつて、國家のために死にゝゆく兵士達をして後顧の憂ひをすくなくする。それだけのことでも國家へ對して、何にも負ふところのない婦人たちに盡させる一分にもなると思つたのは、たしかに先覺者といふ讃辭を呈するに値ひする。

平民の心

五百子を目して餘りに官僚主義で、上流婦人に媚びたものとするのは、すこし過つた批判ではあるまいか。なるほど愛國婦人會は上流貴族の婦人の名をつらねて華々しいものであつた。ことに地方への勸誘は縣知事の夫人が支部長となり、土地の名望家、又は資産家、或は村長、町長の夫人連を驅使して會員の狩出しに盡させた。半襟一掛と裏に彫込れたメタルはそれ等會員の胸に輝いて掛けられたりした。そのやりくちは、遍くて、輝かしい出來榮であつただけに官僚の香ひは高かつた。けれども、また振り返つて

見ると、兵士は一般人民の家庭から出されてゐる。それによつて、枕を高くし富と安寧を得てゐるものは、社會の上級に位したものが、最も多くその被護を蒙つてゐるといつてもよいのである。であるから、心ある平民に會員の一員となつてもらふことを廣く願ひはするが、眞先にたつて身をもつて働かなければならないのは、貴族、上流の婦人の赤心をもつて當然引受けなければならない仕事であらうと思つたに違ひない。私はさういふ風に五百子の心事を忖度して辯護したく思ふ。何故ならば、これから書かうとする五百子の幼時から老年にいたるまでの彼女の飄逸なる面影が、逸話が、さうでなければならないやうな裏附けをしてゐるからである。國家主義者である彼女も、幼時から見聞したことや、時代や、父の血統などからきた勤王愛國の主義に育てられ、彼女も勤王家の一人ではあつたが、彼女の底の底を流れるものは、彼女もすこしもさうとは思はなかつたであらうと思ふほどの激しい民族的の、共和愛國主義ではなかつたであらうか、私は彼女が終焉に近づいてから、

（まだまだ、こんなことでは……）

と、洩した感慨は、敢て愛國婦人會そのものだけにいつたのではない、言ひあらはすことを知らず、自分でも脱し得なかつた自分の魂の、ある解脱を思ひあせつたのではあるまいか？　これはもとより私の推測にすぎないことではあるが……。そしてあまり女史を近代的に偉大なものとして見過ぎたかもしれないが……。

彼女の事業は愛國婦人會で知られたが、彼女はそれだけの人ではなかつた。夙に嘱目したのは朝鮮であつた。彼女が社會的の事業の第一歩は朝鮮の開拓といふ大規模のものであつたのである。彼女は朝鮮があんなふうに貧乏ではしかたがないから、どうかして歳入の增すやうにしなければ

ならない。それが一番の急務だと言つてゐたといふことである。そしてその歳入を増すには蠶絲業をおいて他にないといふのであつた。自來日本の紳士達は、併合になつたのちに誰も彼もかの地に垂涎して鑛山事業の、水田のと手の及ぶだけかの地の開拓をはかつてゐるが、五百子はその以前から將來を見込んでゐたのであつた。彼女のさうした持論は空想から生れたものではなくて、彼女が長い間彼地にあつて、彼の國狀を知り、民情にも通じきつてゐたからである。

彼女はどうしてさう深く朝鮮を知つてゐたのであらうか、それには長い歴史と深い因縁とがある。それを語るには、ずつと古へに溯つて、彼女の家の系圖を述べなければならない。

釜山海高德寺

彼女の生家は肥前唐津に有名な釜山海高德寺といふ寺院である。そして彼女の父は其寺の住職十二世奥村了寛とよばれた人であつた。その父と娘との間柄を記すにさきだつて、もつと古い家系から話さなければならないことがある。その寺院の第一世開基は、淨信法師と呼ばれた人で、在俗のころは名ある武士であつた。奥村の家は代々美濃に住してゐたが、淨信法師が俗名を奥村掃部介と名乘つてゐたをりは織田信長に仕へてゐたが、主君信長が本能寺の旅館に明智日向守のために弑されたのちは、泉州陶器村に世を佗びて隱れすんでゐた。刀を捨て、鎗をすて、一向に武門の譽れを望まぬ人には厭離の心が深かつたのであらう、天正十一年正月元日の夜の夢に不思議を感じて、早速脫俗の身となり世を逃れ出ようとしたのである。けれども不思議な靈夢は、彼を佛門にこそ歸依させたが、命じるには隱遁をゆるさなかつたのである。夢に告げられたのは、

「汝は朝鮮に有縁の衆生であるから、彼土に渡つて念佛を廣めよ」

といふのであつた。彼は靈夢によつて本願寺を訪ひ、十二世教如上人の弟子となつて念佛宗教化のために異國に渡らうとした。教如上人もその志望をよろこんで、木佛尊像一個と、五百代彌陀如來の尊像を自ら畫いたのと、祖師親鸞上人の眞蹟六字の名號と、蓮如上人眞蹟の六字の名號とお文とを授けた。そして朝鮮行きのために附人一人をも差出された。掃部介の淨信法師は、以前からの扈從六人が、どうしても離れようとしないのでそれらをも伴つて天正十三年に朝鮮へと渡つた。もとより口語の通じやうもなかつた。けれども人々の不屈な精神は何事にも打ち勝つて、永祿元年三月には一宇の堂を釜山に建立するやうにまでなつた。秀吉はそれに釜山海といふ山號を與へ、寺名は高德寺と稱へられた。教如上人は自ら筆をとつて、釜山海高德寺の額を贈つた上、さらに祖師聖人の滿九十才の尊像を自畫してその成功に報いた。さうまでになつた布教が一頓挫したといふのは、豐公の征韓の役があつたために、人家村落の廢滅甚しくて、よんどころなく日本に歸つたのは慶長三年のことで、一旦大坂に居たが、唐津の領主寺澤志摩守の懇望によつて唐津に一宇を建てる事になつた。それが今も連綿として、女丈夫の五百子を出した釜山海高德寺である。どうして淨信法師は、出家得道の彼として第一義であつた所信を半で中止たかと言へば、彼の法師が再び渡海の機を待つうちに、海内は德川家康の政權と改まり、渡海禁制といふことになつてしまつたので、彼の鋭志を伸ばすことが出來なくなつてしまつたのである。それにまた、淨信法師は豐公と何等かの默契があつたのではあるまいか？　韓國のものは淨信の渡航を思ひあやまつて、秀吉自身が法師となつて入込んでゐたといふことを信じてゐたさうであるから。

鶴舞城下

兎も角も高徳寺と朝鮮とはさうした因縁があり、本願寺ともさうした深い由緒があつたのである。領主志摩守は高徳寺の境内、下屋敷まで寄進についた。そのまた志摩守の居城は秀吉が征韓のをり名護屋の行營にもちひた用材を請得て築き造つた唐津城である。この名城は絶好の勝地に、しかも大日本の大玄關口たる玄海にむかつて聳え立つてゐるのである。玄海の荒波幾百劫となく松浦半島の東南に訪ひきたり、自然に穿ち波濤をたへたところが松浦潟である。渚は遠く南につゞいたあたりの丘陵に、鬱蒼とした樹木に天守の甍を抜出したのが唐津城趾である。東に虹の松原、西に妙見の松原と、さながら蒼空と、大海との中空にかゝる鶴の兩翼のさまして中に城をからんでゐるに因み鶴舞城の名がある。そしてまた、このあ

たりは古い歴史が多くつたへられてゐる。しかも元冠の仇にしろ、神功皇后の三韓征伐にしろ、皆ことがら外國との接觸である。東方に一里餘、鏡山があり玉島川が流れてゐる。此川岸に停まれた女皇は、釣絲を垂れて戰捷を占はれたときに、香魚が上つたので「めづらしい魚よ」とよろこび仰せられたといふ古事によつて、めづらの川、希見の里ともよばれ、鏡神社は皇后を齊き祭つてある。そのまた鏡山は、松浦佐用姫の夫を慕つて石になつたといふ傳説から、領巾麾山とも呼ばれてゐる。五百子はかうした約束の地に生れたのである。

彼女の出生に先だつて、彼女の父の身の上をすこし語つておきたい。唐津の領主は代つても、かはることのない高徳寺の代々のうちにも、幸不幸はあつて、幕末のうちの高徳寺は頽廢零落の極に達してゐたので、十一世の在住が僊化すると、その跡目について問題がおこり、とも角名家から法嗣を得

ようといふので運動の結果、十二世の方丈として京都から五百子の父了寛が招じられたのである。了寛はまだ九才のいとけない童で名も增千代と呼ばれてゐた。二條家の諸太夫松波大炊頭の子となつてゐたが、その實は大炊頭の猶子となつての下向で、二條左大臣治孝の三男實齊の公達であつたのである。增千代の護役として附いてきた供のなかに、老女の歌浦と呼ばれてゐたのが增千代の生母であつた。增千代の出はさうした家柄であつたのと、非凡な氣質であつたのとで、領主などへ對しても、高德寺だけの格式では引つこんでゐなかつた。傲慢だといはれるほどであつたが、歌浦や其の他の者が從つて薄化粧をした愛らしい高家の公達が松原などを歩いてゐると、高德寺としてはかなりな我儘も人は許したほどであつた。初めは絶佳な風景のためにさとごゝろも出なかつたが或日一人で歩出したのを見るものがあつて大騒ぎをして連もどつた。その人が後に得度して十二世奥村了寛となり、時の領主小笠原家の藩士山田氏から淺子といふ女を娶つて一男一女を生せた、その一人が弘化二年に出生した五百子である。

お眼珠樣

父了寛は「高德寺のお眼珠」とよばれたほどの儼然とした性格を持つた人であり、母は慈悲の權化であるやうな非常な人望家であつた。この夫人があつて、高德寺が信徒の信用があるといふほど德望と婦德の女であつた。ことに了寛は法の道を說くよりも唐津にあつて勤王家の魁でありまた堂堂たる國士であつた。五百子の兄圓心がまだ九才の時了寛は伴つて、京都へいつたことがある。そして竊に今出川御殿へゆき、祖父である二條實齊卿に對面させた。そのをりの調度の質素でありながら淸い感じがしたことを歸つてから圓心が子供心にも語ると、了寛は王室の式微の甚しいこと

を語つてきかせたりした。さういふ風な家庭に五百子は育てられ生立つたのである。見聞くことはみな悲憤慷慨の色をおびてゐる。その上に高徳寺は佛學生が二十人あまりゐる私塾で、木蓮の見事なのがあつたので學堂もその名をとり木蓮館と名告けてあつた。そのほかにもいつも浪士が出入りしたり宿泊つたりしてゐた。その頃の新時代の空氣は高徳寺中に充滿しきつてゐた。ことに了寛は貧乏を氣にかけない氣質ゆゑ、着るものとては毎時二枚とは持つてゐなかつた。あるをり新調の衣の裏地がないとて困つてゐたをり、帷巾をだして來てこれを裏にしろといつたといふほど物毎の些事にかゝづらはなかつた。若いをりふと旅費を失ひ、途中黒田家をたづねて借用を申入れたをりに、小判を杉なりに積んで差出されたなかから、上の三枚だけをとつたといふ恬淡な人物である。五百子の性格は父から多くを讓られたものと見えて、幼時から男らしかつた。ある日澤庵の香の物を丸かじりにしてゐたのを母の淺子が見て涙をこぼして女らしからぬ振舞ひを咎めたといふことである。

志士の感化

けれども五百子はその母のお腹から生れたとはいへ、高徳寺の空氣が五百子の魂をつくつたのゆゑどうにもしかたがなかつた。母の思ひ勞ひから、音曲でも習はせたらばと思ひついて、彼女は五六才から三味線をならはせられた。するとその技に堪能し舞もよくして人を驚かせた。七才には土地の神官戸川氏に學問習字を學んだ。師匠が字は伸々と書けといつたのを覺えてゐて紙からあまつたときに點を机へうつて師を呆然とさせたりした。師匠は何かのをりに五百子をトッチメようと思つてゐたところ、ある日椋の木噴嚏が起つた。それは手習に通ふ子供達をいぢめる町の悪

童があつたのを、五百子はどうかして懲してやらうと思つてゐたところ、その惡童が椋の木の上に乘つて木の實をとつてゐるのを目附けだした。彼女は早速竿のさきをはさめるやうにしていつて下から惡童の足をはさんで降參させたことが師匠の耳にはひつたのである。此時こそと師匠は五百子に机を背負せて追出した。これには流石の彼女も困りきつて百方罪を謝したが許されない。漸く師匠の夫人に謝びて貰つて許された。さうしたまけじ魂の彼女は町の祭禮に踊りが出るのに是非自分も出て見たいといつて母を困らせたりした。十三歳からは裁縫を敎へられてよくした。母親の敎訓がよかつたので彼女は家事にもめはしがきいてゐた。父の了寛は痞癖から他のもののした事は氣に入らぬからであつたがすつかりと氣質を了解んでゐた彼女のすることは着るものの出入れから配膳まで得心がいつて一度も氣をたかぶらせるやうなことはなかつた。それほど父の愛を得てゐた彼女が、たつた一度ではあるが父を怒らしたことがある。それは安政五年彼女が十四歳の時のことで、彼女の父は京都へつれてゆくといふ事を約束したが、據ない用向きのためはたされなかつた。ところが、矢も楯もたまらず飛んでも行きたかつた彼女は母親のお小遣をもつて一人で船に乘込んでしまつた。それを家に知らせたものがあつたので、父の許からは直に歸れと迎ひのものがよこされた。ところが彼女は「はい」とは言はなかつた。

「一度志をたてゝ出たものが、怒られたからつて歸れるものか」

彼女は平氣でさう答へて迎ひをかへした。すると了寛は烈火のやうであつた。また使ひが來た。すると、

「では私の首を持つておいで、いかに父上だつて私の志まで奪ることは出來やしない。どうしても歸れといふなら、私は歸らないといふのだし、首

でもとるより外仕方があるまい」

この返事には流石の了寛も驚いたが、また思直すこともあつて、それきり何にも言はず心中には微笑をおさへかねてゐたといふことである。かくして彼女は船で大阪まで一人旅をした。さうはいつてもまだ無邪氣なし、かも男性的な十四の小娘である。大阪上屋敷お留守居の母方の叔父の家へつけば、屹度三絃を彈けといはれるであらうから、その時に出來ないといけないと、船頭から棕梠箒をかりて、それをかゝへこんでしきりにお浚ひをしてゐたといふことである。そして大阪へ着いた彼女は、濶然として眼を見張つた。彼女の心鏡は大都會に出て何物にか開發されたところがあつたのであらう。

お嬢樣の後姿

大阪から歸つた彼女はやゝ女らしいとりなりになつた。素より彼女は生れついて美貌であつた、六歳の時の天然痘があとを殘してゐたけれども決して醜い容貌ではなかつた。毛髮はことに美しかつた「高德寺のお嬢樣の後姿」といつて町のものは振返つて見たほどである。その美しい女は十六七になると、火のやうな熱を持つて國士の仲間入りをしてきた。彼女の魂の不敵大膽なことは彼女の沈着な行動によつて畏敬されるやうになつた。あるをり一人の町人が捕吏に追れて高德寺に難を避けて救けをもとめた。その折はあやにく五百子ばかりであつたが、彼女は狼狽てずに据風呂の中にその町人を隱してやつた。さうして幾日か隱匿ふうちに了寛が察して、その男を無事におとしてやる工夫をさづけた。丁度其折明朝はその町人を捕へにくるといふ事が知れたので彼女はともすると顚いてばかりゐる彼をはげまして農夫にしたてあげた。そして蓑笠をつけさせ、自分

はその男の子の樣子をして、わざと表門から出ていつて無事に町人を助けたことがある。さうしたことを見てゐるので、彼女が十九歳の時に、了寛は彼女をむづかしい使者に立てた事があつた。それは長州毛利家の家老宍戸氏は親戚であつた。了寛はまづ宍戸氏を說きそして毛利公を說かせるため我說をもたして遣はしたのであつた。當時防長の間は男子の出入が禁じられてゐたので、その難役を五百子にさせたのである。彼女は裏門から出て侍臣を一人連れて船に乘つた長州の海岸につくと、彼女の男裝をしたのを見て取圍れたが、女子である事をあかし、宍戸氏に傳へてくれることを賴んだ。そして彼女は寬々と、迎への駕籠にのつて城內の宍戸邸へ乘込み、父の旨を達し、父の望みをかなへて歸つたのであつた。さうした强い女にも盛りの春は來て花は咲きこぼれた。父了寛は彼女の雄々しいのを悅びながらも、やはり彼女は女としての締緊りをつけさせようとした。そして彼女が二十二歳の時に良緣を見出した。同宗の福成寺大友法忍は稀なる學者であつたので、彼女には良き夫、また兄の圓心には學問ある弟を得させるために婚を結ばせた。了寛の見込み通り法忍は有爲の人材であつたが、不幸にもたつた三年たゝぬうちに不歸の客となつてしまつた。そして獨身となつて歸つて來た彼女は、以前よりも激しく國事に熱中するやうになつた。

若き此寡婦

もうその折は彼女を愛した父の了寛も此世に居ぬ人となつてゐた。父を失ひ、夫を失つた若き寡婦の、あやふいほどの働きぶりを見て、あのまゝにしておいたならば命を失ふこともあらうと案じたのは同志の士達であつた。彼女をおさへるには良夫でなければいけないといふことから、相扶け

るといふ意味から、彼女に再婚を說きつけ溯くに納得させた。選まれて彼女の夫となつた人は、水戸の藩士で、藤田東湖の門人天狗組であり、嘗ては櫻田事變の一人であり、浪士仲間では一方の首領であつた。阪田彦五郎であつた。さうなるまでには母堂山田氏の心をいためたことはどれほどであつたかわからなかつた。母堂は折々泣いて「あんなに亂暴には育てなかつたのに」と言はれたさうである。

主婦となつた彼女は一變して良妻となつた。もとより夫妻とも國事を投捨てたのではない故、その貧苦はいひやうもなかつたほどである。彼女は乳母となつて見たり、仕立ものの内職をして見たりした。彦五郎もまた宿屋の番頭にまでなつた。二人して同棲をするをりは茶の行商に出たりした。彦五郎は終日一文も賣らず、その上川を渡るをりにとりおとして濡らしたお茶を、山にはひつて乾かしながら詩を賦してゐた。歸宅つてからもお茶をぬらした失敗はいはずに詩の自慢ばかりするので、どうしても五百子が一家を支へなければならなかつた。明治八年には窮乏の極平戸にも居にくいやうになつた。ことに良人の籍が水戸にあるままで、夫妻となつてゐないうちに一女をあけ、いままた二子を懷妊してゐるので、どうしても其始末もつけなければならなかつた。が、さてどうして水戸まで行かう、仕方がなければ破れ三味線を抱へ門附けになつてもと思立つたが、横濱までゆくと知己の人に救はれて、どうにか水戸まで訪ねてゆくことが出來た。

水戸の阪田家では二男の彦五郎が家出したまゝ行方が知れないので家出をした日を命日としてゐたところへ飄然と五百子が名乘つて來たので全く思ひもかけぬ事であつた。その上籍をもらひうけたいとの事に、あまりに突然な事なので行掛りから「何處の馬の骨とも知れないものに……」といふやうな言葉が發しられた。それを聞いた彼女は憤然として高德寺奥

村の家系を述べたので、はじめて阪田家でも五百子を了解し、彦五郎の籍のことも聽入れ、その他に三百金を分け與へた。彼女はその金子をもつて歸途東京の柳原の有名な古着市へいつて古着を買入れた。そして悦び勇んで歸ると母の死後丁度百箇日に相當する日であつた。彼女の母はある夜緣に立つて、

「いまごろ五百子はどこの空の下で何をしてゐるだらう」

と言つた日から病が重つて空しくなつたのであつた。彼女は父にこそ彼女の本質を知られてゐたが、母堂には女らしい嘆きを何時もノ〳〵かけてばかりゐるのを心苦しく思つてゐたこととて、さうした遺言を聞くにつけてやる瀨ない不孝の身をなげきかなしんだ。さればこそ後年志望を得てからも母氏のことは忘れかね、彼女が餘命すくなしと知るや母堂の三十三回忌のためにと五十金を納めておいたりした。

古着賣りと賣茶

古着店は幸に利潤があつたので、賣茶の店も開いたが、その利益金の多くは西南戰爭のをりに使ひはたしてしまつた。五百子夫妻は佐賀の江藤新平の亂にも江藤に加擔してゐたので、時の知事は彼等夫妻一味の者に手を廻して行動を監視した。火藥、武器の類は取上げてしまつたので却つて彼女等は罪人となるのをまぬかれたのであつた。その折兄圓心は宗教上官軍であつたので、同志のなかの速り男は圓心を血祭りにあげると騷ぎたてたが、五百子がそれと知つて無事にはからつたりした。さうして彼女等肉親の間には何事もなかつたが、それ等のことが動機となつて彦五郎は世をうとみはじめ、世捨人となつて書籍風月のみを友とするやうになつてしまつた。その次の年には長男勢一を生んだ。年と共に生活は窮極を脫して

いつたが夫妻の仲は冷くなりゆき、終に二十年の九月彦五郎とは離別々居することになつた。別れるをりに彦五郎は「三人の子を干乾にするなよ」といつて立去つてしまつた。親一人となつた後の彼女は三人の子を抱へて働けるだけを働いた。唐津の鑛山に飲食物を賣りにゆけば儲けが多いと知れば、商業物を荷車に積み、一兒を背負つて後押しをして、數里の道を遠しとせずに行きかひしたりした。長女の敏子はけなげにも母を助けて店を守つていつた。そして成長するにしたがつて、母にかはつて家業を營み、五百子をして外に充分活動することを得させた孝子である。

その頃から五百子兄妹には深き思慮があつたのである。彼等は祖先が布教した韓國に目をそゝいだ。そして彼女は妹娘光子に養蠶のことを學ばせた。息勢一は辰野工學博士に教育を一任してしまつた。明治二十二年には憲法發布となり、翌年には國會開設の機運となつた。五百子はそれ

等の運動についても時々上京した。そして善き知己を多く得ることが出來た。のみならず唐津海軍用地拂下げ運動、鐵道布設開港貿易などの運動に沒頭してゐたが、二十八年の第九議會に唐津港となる事をゆるされるや、彼女を迎へる鄕里は熱狂したのである。群集は彼女にむかつて萬歳を叫んだりした。愈ゝ開港式が擧行された時には、彼女の身につけたものはみんな祝品であつた。紋服の上衣は鍋島侯爵家からの到來であり、下着は舊唐津藩主小笠原伯家からの祝儀であり、天野博士からは襦袢、辰野博士からは丸帶、加藤某からは羽織、保利氏からは金環といふ風に、彼女の功績を讃へて主賓の座に導いたのであつた。

末期の事業

三十年六月、奥村兄妹の計畫は本願寺よりゆるされたのである。兄圓心

は布教、五百子は貴婦人會組織といふのもあつたが、その實五百子の目論見は殖産興業のために實業學校の設立にあつた。兎も角も圓心師によつて光州に根據地はつくられたが經營は慘澹たるものであつた。十月半に彼女は風呂釜を携へてゆき、翌年四月一度歸つて、今度は大仕掛けに出直した。その行には二番目の娘光子が重要の人物となつてゐた。光子は養蠶をよくした上に、その婿は農業學校卒業の山田氏であつた。その二人のほかに教師一人、補助員と劍客一人づつ、洗濯婆と下女も伴ひ、その後から教員三人大工、傘職まで呼びむかへた。そして開拓地に桑を播種し、無等山の茶の樹からは製茶を出し、京城に出ては木材を買入れ、學校建築の準備には、男子には壁を塗らし、繩を綯せ、女子には味噌まで搗かせるやうにした。そして自分は脚絆がけにて農具をかついで歩き廻つてゐた。そして造りあげた上棟式には韓客を招待して盛宴を張り彼女は立つて舞つた。

彼女は嬉しさの堰止められぬをりには屹度立上つて舞ひ、そして限りなき滿悅の情を披瀝するのであつた。その後も宮の妃殿下のお前で綿服の婆が立つて舞ひを御覽に入れたことがあるが、それこそ彼女の飾りのない精神からの感動を現はしたものであらう。實業學校設立はそれほどに彼女を滿足させよろこばせはしたが、彼女にはその前から肺を痛めてゐたので、光州の氣候は彼女にとつてよくはなかつた。人々にも諫められ、内地からも呼歸されて彼女は餘儀なく其處を後繼者にゆづつて歸朝した。本願寺新法主光演師はとくに五百子の爲に慰勞の宴を催した。東伏見の宮妃殿下からは、

ますらをもおよばざりけり國のため、心つくしし君がまことは

といふ御歌を賜はり、そのうへベルツ博士に診斷をうけよとの御命まで下された。その後の病氣をいだいた晩年の働きが愛國婦人會をまとめた

のである。

「心は高く氣は清し」と幼時に父から教へられた四字を終身の教へにした、この偉丈夫英雄的な女丈夫にも、十四の少女の春大阪行きの船のなかで、棕梠箒をかゝへて三味線のおさらひをしたといふ可愛らしい逸話のあるのを、私は忘れられず嬉しく思ふのである。

名婦傳 終

不許複製

大正八年四月二十九日印刷
大正八年五月五日發行

定價金壹圓貳拾錢

□名婦傳□

著者　東京市牛込區赤城下町四番地　長谷川時雨

發行者　東京市京橋區南紺屋町十二番地　增田義一

印刷者　東京市牛込區榎町七番地　渡邊八太郎

發行所　東京市京橋區南紺屋町十二番地　實業之日本社
電話京橋八七四、八七五、八七六、九八九
振替口座東京三二六番

日清印刷株式會社印刷

□子供の感情教育　新刊　西宮藤朝先生著　定價壹圓廿錢　郵稅六錢　總布四判六版

□母と子　五版　東京女子高師教官　下田次郎先生著　定價七十五錢　郵稅六錢　總布四判六版

□增補胎教　十七版　東京女子高師教官　下田次郎先生著　定價七十五錢　郵稅六錢　總布四判六版

□親のため子のため　六版　東洋家政女學校長　岸邊福雄先生著　定價一圓　郵稅八錢　總布四判六版

□子供本位の家庭　再版　早稻田大學教授　安部磯雄先生著　定價一圓　郵稅八錢　總布四判六版

□家庭　六版　下田歌子先生著　定價一圓七十錢　郵稅二十錢　總菊判

□婦人常識の養成　十四版　下田歌子先生著　定價一圓五十錢　郵稅二十錢　總菊判

□婦人禮法　十五版　下田歌子先生著　定價一圓五十錢　郵稅二十錢　總菊判

□海へ　六版　島崎藤村先生著　定價一圓廿錢　郵稅八錢　總美本判

□現代の藝術　再版　文學博士　上田敏先生著　定價一圓廿錢　郵稅八錢　總布四判六版

□渡り鳥日記　三版　文學博士　松本亦太郎先生著　定價二圓廿錢　郵稅八錢　總布四判六版

□社會と自分　十四版　夏目漱石先生著　定價一圓廿錢　郵稅八錢　總布三判六版

□人性論　三版　醫學博士　永井潛先生著　定價二圓卅錢　郵稅十二錢　總布菊判

□哲學と文藝　再版　文學博士　桑木嚴翼先生著　定價一圓廿錢　郵稅八錢　總布四判六版

□文明の末路　五版　イ・ドネリー氏原著　定價一圓　郵稅八錢　總布四判六版

□江戸俠客物語　三版　坪内、三上二博士序　林和先生著　定價九十錢　郵稅六錢　總布四判六版

□家庭小説 龍巻 上巻三版 下巻再版 渡邊霞亭先生著 定價各册壹圓 郵税各册十二 四六判 計錢

□家庭小説 うき身 上巻三版 下巻再版 柳川春葉先生著 定價各册壹圓四十 郵税各册十二 四六判 錢

□家庭小説 銀笛 上巻八版 下巻七版 小杉天外先生著 定價各册壹圓三十 郵税各册八 四六判 錢

□海へ 五版 島崎藤村先生著 定價一圓三十錢 郵税八 四六判 錢

□花園の秘密 再版 岩下小葉先生譯 定價一圓 郵税八 四六判 總布錢

□涙の物語 二十二版 岩下小葉先生著 定價四十錢 郵税六 四六判 錢

384
1-5

終